

令和4年度 日本学校図書館学会研究発表大会

研究発表要旨集

期 日 令和4年9月17日（土）

会 場 昭和女子大学（世田谷区太子堂1-7）
1号館5階 5S33
Zoomでのライブ配信も実施

日本学校図書館学会

Japan Society of School Library Science

令和4年度日本学校図書館学会研究発表大会プログラム

9月17日（土） 対面とオンラインライブ併用方式

全体司会 事務局長 栗林 昭彦氏

10:00 開会あいさつ 日本学校図書館学会会長 吉富 芳正

第I部 一般研究発表【司会】研究委員会（保刈 栄紀）

時間

研究主題、発表者氏名【所属（職）】（共同研究者）

- | | | |
|---|-------------|--|
| 1 | 10:10-10:35 | すべての教職員でつくる探究型読書のデザイン 【上山 朋子・高橋 美貴・西城戸 孝吉 （盈進中学高等学校読書科主任・図書館司書・教頭）】 |
| 2 | 10:45-11:10 | 読書記録アプリ Yomumo の活用による児童の読書量の変遷について 【石故 裕介（桐蔭学園小学校教頭）、片山 昇（株式会社 ETeq代表取締役）】 |
| 3 | 11:20-11:45 | 特別支援学校（知的障害）における学校図書館を知の拠点とした授業改善の取組 ～カリキュラムマネジメントを意識して～ 【土井 美香子（（株）内田洋行・NPO法人ガリレオ工房）、 熊井戸 佳之・佐藤 亜紀子（東京都立城東特別支援学校 主幹教諭・校長）、 大貫 麻美（白百合女子大学准教授）、野口 武悟（専修大学教授）】 |

11:45-13:00 昼休み

第Ⅱ部 課題研究発表【司会】研究委員会 庭井 史絵

「情報化社会と学校図書館— 情報活用能力の育成と探究的な学びの視点から」

13:00-13:05 課題趣旨説明 副会長 (鎌田 和宏)

13:05-14:00 基調講演 堀川 照代氏 (放送大学客員教授)

演題「学校図書館の情報センター機能」

| 時間 | 研究主題、発表者氏名【所属(職)】(共同研究者) |
|---------------|---|
| 4 14:00-14:25 | 探究的な学習の基礎を育むSTARTプログラムの実践 ～探究的な学びをとおしての情報活用能力育成～ 【勝山 万里子(茨城キリスト教大学兼任講師) 篠原 敦子(茨城県立水戸第二高等学校教諭)】 |
| 5 14:30-14:55 | 情報活用能力の育成を目指した中学校技術・家庭科(家庭分野)の授業実践 ～授業で学校図書館を活用することの有用性の検討～ 【関野 かなえ・村上 恭子(東京学芸大学附属世田谷中学校司書教諭・学校司書)】 |
| 6 15:00-15:25 | 松江市教育委員会学校図書館支援センターにおける「学び方指導體系表」の活用 ～「学びをつなぐ」実践を通して～ 【鎌田 和宏(帝京大学教授)、 林 良子(元松江市学校図書館支援センター教育指導講師)】 |

15:25-15:40 休憩

15:40-16:20 総括討論とまとめ

16:20 閉会あいさつ 日本学校図書館学会副会長 新井 啓子

16:30 閉会

ご挨拶

本日は、日本学校図書館学会の第25回研究発表大会にご参加くださり、誠にありがとうございます。

本研究発表大会は、志を同じくする研究者、実践者、経営者などが一堂に集い、研究や実践を発表し合い、意見や情報を交換し合って更に研究や実践を深めるための最大かつ貴重な機会であります。with コロナの時代にあっても、そうした意義を損なわず充実した研究発表大会ができる手立てを検討した結果、本年度は、オンラインライブの方式と対面方式を組み合わせ開催することといたしました。

皆様ご存知のように、本学会は、次の4つの柱を基本理念として活動しております。

- 1 新しい視点に立って学校図書館のあるべき姿を体系化し、学問としての学校図書館学を構築する
- 2 学校の教育実践と図書館理論を統一した学校図書館実践理論の確立を目指す
- 3 国内外の関係機関や団体との共同研究や情報・交流を積極的に行う
- 4 学校図書館に関する研究者を育成する

学会としてのこうした基本理念を踏まえ、大きく変化していく社会の中でこれからの学校図書館像をその研究や実践に関わるわたしたちが自ら描き出していくことが求められております。このため、令和4・5年度においては、「子どもの学びを支える学校図書館の理論と実践の創造」という中心テーマを掲げて本学会の諸事業を進めていきたいと考えております。

これらの具体化の中心となる場が、本日開催されるこの研究発表大会です。本日の大会では、3本の一般研究発表に加えて、「情報化社会と学校図書館—情報活用能力の育成と探究的な学びの視点から」という課題で基調講演・発表・討論が予定されています。

いずれも学校図書館が抱える課題に真正面から取り組むものであり、学校図書館の充実・発展に結び付くことが期待されます。そのために、本日ご参会の皆様から様々なご意見をいただき、活発な論議になることを願っております。どうぞ、よろしく願いいたします。

最後になりましたが、本日ご講演をいただく放送大学客員教授 堀川照代先生をはじめ、発表者の皆様、大会の企画・運営に当たる白敷哲久研究委員長をはじめとする研究委員会等関係の皆様深く感謝を申し上げ、ご挨拶とさせていただきます。

令和4年9月17日

日本学校図書館学会会長 吉富 芳正

すべての教職員でつくる探究型読書のデザイン

盈進中学高等学校 ○上山朋子・高橋美貴・西城戸孝吉

〈要約〉

本研究は、盈進中学高等学校（広島県福山市）に30年続く「読書科」による、あたらしい「探究型読書」のデザインへの挑戦という実践である。コロナ禍も3年目を迎え、全く予想がつかない現在と未来において、学校は急激なるDX時代に突入、その存在意義について再考を余儀なくされた。大学入試に求められる力も、物事を深く見詰め解決を図る高いレベルの読解力・思考力が問われている。子どもたちにとって「読書」こそこれからを生き抜くための哲学を与えてくれる学びの技術であり、学校図書館と協働して学びを構築することには大きな意味がある。一見前時代的な本や図書館の学びを学校全体で面白くできないか、夢のある読書空間づくりは始まったばかりだ。

〈キーワード〉

読書活動・読書支援・探究・論文・教科教育・特別活動・朝読書・学校図書館

はじめに

創立118年の歴史を持つ本校は、1992年に再開した中学校における特色教育の一環として「読書科」を設置した。古今東西の名著を中学3年間で読む活動は一定の成果を上げたが、蔵書および図書館の老朽化、学力とのミスマッチも生じた結果、形骸化を免れない状況に陥った。

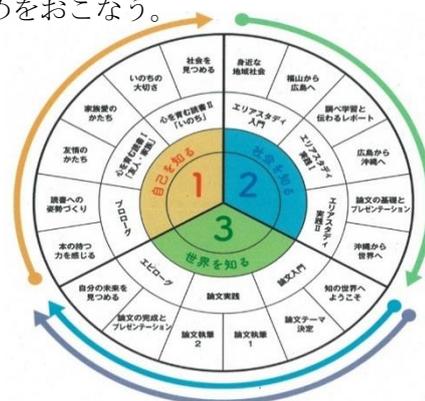
そこで2016年度から教材・カリキュラムの抜本的見直しを図る「読書科」改革に着手。この学びのエッセンスと手法を中高6年間の「探究」の授業にも投影した。2019年の新校舎建築の際に学校図書館を「知の集積地」としてリニューアルし、今まさに、学校全体を挙げて読書推進活動に取り組む機運が高まっている。

1 研究の目的

本研究の目的は、本校「読書科」がマイナーチェンジを繰り返しながらも継続的に積み重ねてきた読書指導の実践を整理するとともに、「読書科」の学びをさらに学校全体で汎用化するための課題を摘出し、その方法を模索する機会とすることにある。あわせて学校図書館のさらなる機能充実を目指し、国語を中心とした教科担当者だけでなく、図書館司書、学級担任、管理職まで、学校全体で一丸となって取り組める読書空間づくりへのアプローチを考えるきっかけとしたい。

2 研究の方法・内容

本研究は主に生徒の読書活動に対する指導理論を実践によって検証していく形式をとる。そこで中学3年間の「読書科」の学びのテーマとカリキュラム（下図）に沿って学年ごと実践のまとめをおこなう。



【中学1年生】：自己を知る

小学生から中学生になった生徒たちの心の成長を最も重要視する読書活動をおこない、ひとづくりの土台とする。本を好きになる1年間。（おもな取り組み例）

- ・図書館オリエンテーション
- ・絵本教材（しおり製作・物語作り・絵本製作）
- ・全校読書感想文コンクール
- ・ブックトークやおすすめ本の紹介
- ・読んだ本の作者へお手紙を書く
- ・読書活動+ホンモノとの出会い
- ・小説の舞台へのショートトリップ

【中学2年生】：社会を知る

職業観の育成と平和学習という2大テーマを支える読書活動を推進。他教科（社会・理科・美術・音楽・道徳）ならびに学年団と活発に連動を図り、ドラマチックな読書活動を展開する。

憧れの人に手紙を書こう



中学1年生からのキャリア探究活動と連動し、玄田有史『14歳からの仕事道』を読んで、それぞれの憧れる職業に就いている人物に手紙を書く。ノーベル賞受賞者や世界的建築家などからの返事に生徒たちは大喜びした。

平和学習（福山→広島→沖縄→世界）

広島のお好み焼き本に始まり、沖縄やベトナムを舞台にした平和本まで及ぶ。その過程で社会で歴史、理科でその地域の植生、美術・音楽では伝統工芸の制作や音楽文化を扱い、学びが教科横断的・重層的になる仕組みになっている。

【中学3年生】：世界を知る

3年間の学びの集大成として修了論文に挑戦。各生徒の選んだ研究テーマに応じて、全ての教職員で個別指導をおこなう今年で16年目の取り組み。学校全体で読書活動を推進し、探究活動を支援するというのが本校のスタイル。

フィールドワーク

論文では書籍で調べたことに加えて、自分でフィールドワークを計画して実行、調べ学習をより深化させることを義務付けている。

プレゼンテーション大会



自分の研究内容を後輩に向けてプレゼンテーションする機会を設けることで、双方のモチベーションアップにつながっている。

3 研究の結果

1学期末の生徒アンケートの質問項目「読書の授業は楽しいですか」に対して「あてはまる」と回答したのは中学1年生の91.6%、中学2年生の88.9%だった。また「修了論文には積極的に取り組んでいますか」という間に中学3年生の87.5%の生徒が「あてはまる」と回答した。

学校全体で読書を推進することで、中学生になって本好きになった、読書習慣がついたという生徒も多く見られる。次項にも記すが、こうした生徒像をさらに読書から遠ざかる傾向にある高校生まで拡大していくことが今後の課題であると実感している。

4 研究のまとめと課題

本研究を通して本校における読書推進の今後の鍵となってくるのは、高校生へのアプローチであることが明確になった。そこで、今後早い段階で取り組みたい事案を以下にまとめる。

（1）朝読書の質的向上

学校全体で毎朝10分の朝読書をおこなっている状況をもっと生かす方法を考える必要がある。「学年別推薦図書」の本格運用にも着手したい。また、今年度2学年で朝読書の時間に「読書記録」を付ける取り組みを試験的におこなっている。来年度から全学年で取り組む予定。

（2）高校2年生の修了論文

現在中学3年生で取り組んでいる修了論文を第Ⅰ期として、第Ⅱ期を高校2年生「探究」に設定したいと考えている。高校生の読書活動・図書館利用にも変化が見られると予測できる。そのためにも中学3年生のカリキュラムを大幅に変更する必要がある。

（3）学校中が図書館に、そして地域に

学校図書館への導線を築くために、本を図書館外へ出し、学校のどこでも本に触れることのできる環境を作る。また、ポストコロナは図書館を地域開放する。それは新校舎計画段階からの学校意思である。従来の学校図書館の概念を超えたオープンマインドな読書環境の整備を目指したい。

読書記録アプリ Yomumo の活用による児童の読書量の変遷について

桐蔭学園小学校 石故 裕介
株式会社 ETeq 片山 昇

<要約>

本研究では小学生向けに開発した読書記録アプリ、「Yomumo」を活用することによって児童にどのような読書量の変遷があるかを調査したものとなる。

PISA2018 の分析によると、読書を肯定的にとらえる生徒のほうが成績が高いという結果が出ている。しかし同時に本を読む頻度の減少も指摘されている。本を読む頻度の向上が成績向上にもつながると考え、本を読む頻度を上げるために小学校時代における読書量の確保が重要と考える。

現在、本を読む頻度を高めるために、昨年度より読書記録アプリの利用を実施し、その効果を検証している。もともとは紙で読んだ本の記録を取っていたが、アプリにすることにより次の利点があった。

○記録の共有 ○記録への反応 ○読んだ量の見える化 ○いつでも記載が可能 ○記録の手間の削減
こうした利点が読書量の変遷に効果があるか、また、読書量が変わることによる読書の質の変化があるかなどを調査している。

<キーワード>

読書教育, 読書量, 小学校, 読書記録, アプリケーション

はじめに

児童の読書量が減っていると言われて久しい。読書量と学力には関連性があると考えられることから、読書量を確保することで学力にも好影響があると考え、本研究を開始した。

1 読書量とは

全国学校図書館協議会の調査によると小学生の平均読書冊数は 2018 年には 1 か月に 9.8 冊と大きく下がったものの、2021 年の調査では 12.7 冊と現在は増加傾向にある。様々な要因はあるものの、調査開始した 1991 年は 1 か月の平均読書量は 5.8 冊であったことを考えると、この 30 年で平均読書冊数は倍になっている。

同じく、1991 年には 10.7% だった不読者（1 か月に 1 冊も読まない児童）は 2021 年には 5.5% と、こちらも約半数程度になっている。

中学生は読書量は冊数こそ少ないものの右肩上がり、高校生は横ばいである。不読者は中学生は右肩下がり、高校生は上下は大きいものの全体としては右肩下がりであるため、程度の差はあれども小学生から高校生まで、読書量の減少という実態には当たらないデータとなっている。

PISA では読書頻度が 2009 年調査時よりも減少している。そのため、読書量の増加には平均

冊数だけではなく、読書頻度も重要な要素であると考えている。

2 読書記録アプリ Yomumo の開発

読書量を増やす試みの一つとしてこれまでも読書記録カードを児童に書くように指導をしてきた。読んだことをできるだけ記憶に残すこと、作者や出版社などにも興味を持ってもらうこと、日記代わりに読んだ本を記録したものを読み返すことで読書体験を思い出せることなどのためである。

しかし、記録するには時間がかかり、手書きで一定量の文章を書くことを面倒と思い、読んでいるものの記録カードを書かない児童やまとめて書くことで読んだ時の感想を忘れている児童などがこれまでは多く見られた。

そのため、記録自体を楽しめるようなデジタル化された仕組みができないかということを考えてきた。既存アプリは小学生向けでないことから、2021 年度に桐蔭学園小学校と株式会社 ETeq とで共同で読書記録アプリ Yomumo を新規に開発した。Yomumo はデジタル化された読書カードを保存・共有できるアプリで、図書の ISBN バーコードをタブレットのカメラで読み取ることで自動で書誌情報や書影の入力する機能のほか、児童間での感想の共有や、リアクショ

ンする仕組みが盛り込まれている。

3 読書量の調査方法

Yomumo の導入は 4 年生は 10 月から、3 年生は 1 月からであり、それ以前は紙での読書カードを使用していた。学期末にカード枚数を記録し年度ごとに比較をした。読んだ本の種類などは問わない形の調査となる。今後は月ごと、読んだ本の種類やページ総数などでも調査をしていきたいと考えている。

ただし、新型コロナの影響で調査していた期間内で 1 年間を通して児童が登校できた年度がないため、正確な比較になっているかは詳細な検証も必要と考えている。

4 調査結果

同じ学校の前年の紙媒体で記録していた時と、アプリ化した際の記録冊数の合計の変遷は次の通りとなる。

また、読書カードの過去のデータがあるのが 2021 年度の最後まで私が担当している学年のみとなっているため、基本的にそちらでの比較となる。

A 2020 年度（導入前）と 2021 年度（年度途中で導入）の同学年一人当たり

| | 2020 年度 | 2021 年度 |
|-----------------|------------------|------------------|
| 2021 年度 3 年生 | 一人当たり 35.56 冊 | 一人当たり 42.59 冊 |
| 2021 年度 4 年生 | 一人当たり 36.16 冊 | 一人当たり 48.21 冊 |

→Yomumo 導入年度は前年度よりも記録数が増加している。

※Yomumo による記録数

2021 年度 3 年生 一人当たり 15.22 冊

2021 年度 4 年生 一人当たり 18.33 冊

B 紙の読書記録カードの記録冊数推移（合計）

| | 2 年生時 | 3 年生時 | 4 年生時 |
|-----------------|--------|----------|----------|
| 2021 年度 5 年生 | 記録なし | 5416 冊 | 3354 冊 |
| 2021 年度 4 年生 | 6343 冊 | 3544 冊 | (2929 冊) |
| 2021 年度 3 年生 | 3627 冊 | (2792 冊) | 記録なし |

→Yomumo を除くと学年が上がるにつれて記録数は減っていく傾向がある。

※括弧の数字は年度途中で Yomumo を導入

5 結果のまとめ

Yomumo を利用しない場合は同じ学年で比較すると記録数は下がっていく傾向がある。読む本のページ数の関係や他教科の課題なども増え、読書に取り組む時間が少なくなることなどがあるが、学年が上がるにつれて読む量が減っていくということを示すデータとなっている。

しかし、今回 Yomumo を利用したことにより、利用した 2 学年では前年度よりも記録冊数が増加することとなった。Yomumo を利用したのは年度途中からのため、年度始めから利用していれば更なる増加が見込め、より顕著な結果が出たと考えられる。

このことにより、Yomumo の活用は児童の読書記録数の明らかな増加に寄与することが確認できた。

6 今後の課題

今後は次の 4 点を中心に調査を進めたい。

- ・新型コロナ禍という特殊な状況のため、本当にこの結果が正しいか、詳細な分析ができていない。継続調査を実施予定。
- ・導入直後のみの増加の可能性もある。今年度、次年度も含め継続的に調査を行う。
- ・他校の利用も少しずつ出てきている。また、新規機能も随時追加中。小学生の読書活動のプラットフォームとなるようなアップデートを今後も進めていきたい。
- ・PISA 調査の読書頻度の調査は今年度実施していきたいと考えている。記録の回数調査など、アプリで取得可能なデータを用いた詳細な分析などを進めていきたい。

調査、分析を重ねることでさらに児童にとって使いやすいアプリとし、より読書活動が活性化することを期待している。

【引用・参考文献】

国立教育政策研究所 「OECD 生徒の学習到達度調査 2018 年調査 (PISA2018) のポイント」
https://www.nier.go.jp/kokusai/pisa/pdf/2018/01_point.pdf, (参照 2022-08-15)
公益社団法人 全国学校図書館協議会 『「学校読書調査」の結果』 <https://www.j-sla.or.jp/material/research/dokusyotyousa.html>, (参照 2022-08-15)

特別支援学校（知的障害）における学校図書館を知的拠点とした 授業改善の取組

～カリキュラムマネジメントを意識して～

(株) 内田洋行 NPO 法人ガリレオ工房 土井美香子

東京都立城東特別支援学校 熊井戸佳之

東京都立城東特別支援学校 佐藤亜紀子

白百合女子大学 大貫麻美

専修大学 野口武悟

〈要約〉

GIGA スクール構想による 1 人 1 台端末とともに学校図書館の積極的な活用が重視されている。学校図書館がもつ、学習内容を豊かにする学習センター機能や情報を収集し活用する能力を育成する情報センター機能の活用は、特別支援学校においても重要である。本研究では、特別支援学校（知的障害）でのこうした学校図書館機能の活用事例を収集・分析した。その結果、児童・生徒の実情をふまえた多様なメディアやサービスの活用、継続的な情報アクセスの保証、教員の授業改善への支援といった活用がされていて、学校図書館は知的拠点として多様な役割を担い得ることがわかった。

〈キーワード〉

学校図書館 知的拠点 授業改善 特別支援 理科読

1 背景と目的

今次の学習指導要領では学校図書館の機能の活用が重視されている。特別支援学校においても「学校図書館を計画的に利用しその機能の活用を図り、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善」（文部科学省，2018）を行うことが求められている。また、GIGA スクールの推進による「1 人 1 台端末の環境下において学校図書館の積極的な活用」も求められている（文部科学省，2022）。これは学校図書館を知的拠点として位置づけ活用することを求めていると考えられる。しかし特別支援学校の学校図書館については、読書センター機能の活用に関する実践やそれに基づく知見の積み重ねは以前からなされているものの、学習センター機能、情報センター機能の活用に関する実践事例の共有は未だ途に就いたばかりである。

本研究では、特別支援学校における学校の図

書館が知的拠点として機能することを検証することを目的として、事例の収集と分析を行っている。先行研究では、特別支援学校（知的障害）小学部第 5 学年における教室内での学びを社会生活の文脈下で活用する足場かけとして学校図書館を活用した事例（大貫ら，2021）また、特別支援学校（知的障害）中学部第 3 学年社会・理科において科学的体験活動と関連する図書の活用を包含する「理科読」に学校図書館を活用した事例（土井ら，2022）について分析してきた。

2 研究の方法

まず城東特別支援学校中学部第 1 学年社会・理科の単元「社会のルールやマナー」の事例について、学習指導案と実践記録をもとに、学校図書館の活用状況を分析した。次に同様の手法で城東特別支援学校小学部第 5 学年における生活単元学習を核とした教科横断型学習での学校図書館活用事例を分析した。

3 研究の結果と考察

中学部第1学年社会・理科の単元「社会のルールやマナー」の事例分析から学校図書館が以下のように活用できることが分かった。

- ・生徒の実情を踏まえた多様なメディアの提供
担任と学校司書が協働して、書籍、資料集などの教材、雑誌、インターネット等を効果的に組み合わせ用いることにより実現していた。

- ・継続的な情報アクセスの場の保証

学校図書館に所蔵している資料を使うことで、単元を学習している時間全体を通していつでも情報を見返したり、新たな情報を収集したりできることを保証していた。

次に小学部第5学年における生活単元学習を核とした教科横断型学習での学校図書館活用事例を分析した。この事例では、「色水遊び」という生活単元学習を核としながら、色の名前、「混ぜる」という言葉の獲得（国語）、形や色への着目や表し方の工夫（図画工作）、数への着目（算数）など複数の教科を横断した学びが構築されていた。この事例では学校図書館が以下のように活用されていた。

- ・授業計画立案の支援

この教科横断型学習の立案にあたって、担任の依頼に応じ、学校図書館司書が効果的なメディアの活用方法について具体的な提案を複数行っていた。この提案を踏まえながら協議が行われ授業計画が立案されていた。

- ・人的リソースを含めた多様なサービスの提供
多様なメディアを効果的に組み合わせ活用する提案に合わせて、学校司書による読み聞かせやわらべ歌遊びなどの教室への出前を活用し、授業改善に役立てていた。

4 総括

本研究を通して、知的障害の特別支援学校に

おいて、学校図書館が知の拠点として多様な役割を担えることが明らかになった。この活用においては授業前からの担任と学校司書の協働など多様な要素が含まれていることも分かった。このような授業計画立案が多くの学校で可能となるよう、どのような手順を踏んで授業計画の立案及び実践がされていたのかを視覚化することを今後の課題とする。

【謝辞】

本発表は、公益財団法人日本教育公務員弘済会令和4年度日教弘本部奨励金による「特別支援学校(知的障害)における授業改善に資する学校図書館の活用に関する実践的研究」(研究代表:野口武悟)の研究成果の一部である。

【引用、参考文献】

大貫麻美・野口武悟・熊井戸佳之・二井康文・土井美香子(2021) 特別支援学校(知的障害)における算数を核とした学びの連続性に関する事例的検討: 学校図書館を活用した「数」概念の構築, 保育・教育の実践と研究, (6), pp. 19-27.
白百合女子大学人間総合学部初等教育学科
土井美香子・大貫麻美・野口武悟(2022) 特別支援学校(知的障害)における学校図書館を活用した授業改善実践~中学部 社会・理科, 第43回全国学校図書館研究大会(オンライン大会)
文部科学省(2018) 特別支援学校教育要領・学習指導要領解説 総則編(幼稚部・小学部・中学部), 開隆堂出版
文部科学省(2022) 1人1台端末環境下における学校図書館の積極的な活用及び公共図書館の電子書籍貸出サービスとの連携について
https://www.mext.go.jp/content/20220803-mxt_jogai01-000003278_1.pdf
(最終確認日 2022年8月13日)

探究的な学習の基礎を育む START プログラムの実践 ～探究的な学びをととしての情報活用能力育成～

茨城キリスト教大学 兼任講師 勝山万里子
茨城県立水戸第二高等学校 教諭 篠原敦子

G I G A スクール構想が本格的にスタートする中、高校においては「総合的な探究の時間」が今年度から実施されている。生徒が PC やタブレットなどを使用しデジタル教材の利用の機会が増える中で、探究的な学習に必要な基本的なスキル（図書館の使い方、情報の探し方、参考文献の書き方等）もなく、紙媒体の資料の活用がないがしろにされて探究的な学習が実施されている学校が多いのが現状である。SSH 高でもある水戸二高では、学習をする上で「情報活用能力」は必須である。そこで探究的な学習のプロセスを一連の流れとし、情報活用能力を育むための「START プログラム」を図書部と SSH 部の職員が協働で開発した。平成 24 年から実施している本プログラムの 10 年の実践をもとに、START プログラムの内容、在校生・教職員の変化、卒業生から見た START プログラムの成果について報告する。それにより、学校図書館を拠点とし「情報活用能力を育成する」という視点を持ちながら探究的な学習を行うことの有用性を考えたい。

〈キーワード〉

探究的な学習 探究のプロセス 情報活用能力 総合的な探究の時間 総合的な探究の時間

はじめに

学習指導要領の改正により、今年度から高校は「総合的な学習の時間」（以下「総学」）が「総合的な探究の時間」（以下「総探」）となり、より深化した探究的な学習の実施が求められている。しかし「総学」の時期から現在まで、探究をする上で必要なスキルを身に付けている入学生は水戸二高でのオリエンテーション時の調査では毎年 1%にも満たず、入学後の学習に支障を来す。そこで、SSH 部と図書部が連携して開発したのが情報活用能力の育成を目指した「START プログラム」である。現在は「二高の学びの基礎」「SSH のベースプログラム」として置づけられ、各教科の学習の基礎となり、進路実現にも有効であると認識されている。水戸二高の実践を紹介する中で、G I G A スクール構想及び探究的な学習を検討する拠点としての学校図書館のあり方を考えたい。

1 茨城県立水戸第二高等学校について

水戸二高は、明治 33 年に県下初の女学校として創立された伝統ある全日制普通科の県立高校である。平成 18 年からスーパーサイエンスハイスクール（SSH）の指定を受け、女性科学者の育成を視野に入れた教育を行っている。令和 3 年度末現在、国公立大学に 137 名が合格し、卒業生は教育、医療、行政、芸術など各分野のリーダーとして活躍している。

学校図書館は、普通教室の約 3 倍、座席数 42 席、蔵書約 4 万冊、新聞 5 紙、雑誌、インターネット、データベース（ジャパンナレッジ、朝日けんさくくん）が利用可能である。また館内での飲食が可能であるため、生徒による図書館 Café、ALT による Global Cafe が開かれるなど、生徒の興味関心に応じて、自発的主体的に最大限自由に利活用できる環境を整備している。

2 「START プログラム」の実践

「START」とは「Student Talk About Reading Themes」の頭文字で、「二高生一人一人が自分のテーマを持ち、調べ、自分の言葉で伝える力を持って人生を切り拓いてほしい」との願いから生まれたプログラムである。総探の時間で、入学直後の1年生全員が、自分の興味のある人物や事柄などから「課題設定」「情報収集」「整理分析」をし、「まとめ・発表」までを一連の流れとして1年かけて行う（授業時間は14時間）。目指しているのは、地域の女性リーダーとして活躍できる力の基盤としての情報活用能力等の育成である。この授業の指導は各学級の副担任が担当し、それを学校図書館が支援している。プログラム誕生のきっかけは、生徒間の情報活用能力の格差である。中学校までの図書館環境の格差に起因するものであったが、SSHの活動は勿論通常の授業や大学進学にも影響を来た。図書部としてもSSHとしても1年生のうちに、この差を埋めたいと考えた。関係の職員が相談を重ね、情報センターとしての学校図書館が主体となって探究的な学習を行う中で、地域の女性リーダーとしても必要とされる情報活用能力を育成することになったのである。

10年を経過した現在は、各時間に配布していた説明資料を一冊のテキストにして1年生及び全教職員に配布した。テキスト化することで、学びが具現化・共有化され、初めて担当する教員でも指導しやすいと評価されている。

3 成果

① 在校生

アンケートでは9割を超える生徒が「一連の流れを一人で行うことで多くの力が身についた。」と答えている。具体的な記述を以下に示す。

ア 図書館の使い方が初めて分かった。

イ 情報収集の際に「信頼出来る情報」の存在を知り、意識して使うようになった。

ウ スライドにまとめる際に、第三者を意識す

るという視点を持つことができた

エ 発表が苦手だったが、友だちの発表から学ぶ事ができ、苦手意識がなくなった。

②教職員（教科担当、進路指導部長）

入学時の早い時期に探究の型を学ぶ事で、その後の指導がスムーズである。進路に関わる学習でも役立っている。特に入試資料としてのプレゼン資料への参考文献明示、服装態度言葉遣いなど再指導の必要がない。「プレゼンの二高」と言われているのはSTARTプログラムがベースになっているからだ。

③卒業生

当初の生徒が社会人3年目となった。彼女たちの解答は職種を超え共通であった。

ア テーマ設定から発表までの一連の流れを一人で行ったことで力が身についた。

イ 社会では、自分の意見に常に根拠を求められる。情報収集の基礎を16歳で学べたことは有り難かった。

ウ 発表の基礎を学び、経験を重ねたことでわかりやすい発表が身につき、大学でも社会にでてからも、高評価を得ている。

4 研究のまとめと課題

このプログラムを経験した生徒・教職員、卒業生の感想から、「総探」における、探究的な学習で「情報活用能力を育成する」という意識を組み込むことが、これからの社会を生きる上で重要かつ効果的な事であると言ったことがわかった。

学校図書館は資料の提供等を通して各教科と繋がっており、担当の教員との打ち合わせを通して、新たな学びを創出することもできる環境にある。これからの予測困難な社会を生きる基盤となる情報活用能力を育成する拠点として、学校図書館の活用を促進していきたい。

【参考文献】

塩谷京子・鎌田和宏『学習指導と学校図書館』放送大学教育振興会 2022年

情報活用能力の育成を目指した中学校技術・家庭科（家庭分野）の授業実践 ～授業で学校図書館を活用することの有用性の検討～

○ 東京学芸大学附属世田谷中学校 司書教諭 関野 かなえ
東京学芸大学附属世田谷中学校 学校司書 村上 恭子

〈要約〉

本事例は、中学校技術・家庭科（家庭分野）（以下、家庭分野と示す）において、「よりよい住まい方を考える」を学習のねらいとし、「住生活」と「家族・家族関係」、「環境」の領域を横断し、学校図書館と ICT の活用を通して情報活用能力の育成を目指した授業実践の一例である。今回、情報活用能力の育成に向けて2つの側面から実践を行った。一つ目は、生活の課題をよりよく解決し、学んだことを生活に生かすという家庭分野の資質・能力を大切にし、ねらいの実現を目指したことである。二つ目は、教科のねらいの実現だけにとどまらず、「VUCA の時代」を生き抜き、新時代に求められる力を育成するうえで、学校図書館を活用することの意義を司書教諭の立場から見いだすことである。学習のねらいを実現に向けて授業実践に取り組む中で、授業後の生徒の振り返りやアンケート結果から、情報活用能力を育成する上で学校図書館が有用であるということが分かった。

〈キーワード〉

情報活用能力 中学校技術・家庭科（家庭分野） 学校図書館 学校司書との連携
VUCA の時代 ICT の活用

はじめに

学習指導要領総則には、学習の基盤となる資質・能力として、言語能力、問題発見・解決能力等に加え、情報活用能力の育成が重要であると示されている。また、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力として、「生きて働く「知識・技能」の習得、未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」の育成、学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」の涵養」の三つの柱が示された。（下線、筆者による）この下線部分に新時代に求められる力が集約されていると考える。

今は「VUCA の時代」と言われ、社会理念や価値観等の変化が急激に進み、将来の予測が困難である。だからこそ、「学習指導要領総則」に示されているように、「情報を主体的に捉えながら、何が重要かを主体的に考え、見いだした情報を活用しながら他者と協働し、新たな価値

の創造に挑んでいくためには、情報活用能力の育成」が今後ますます重要となると考える。

このことから、教科の学びの実現に向けて、教科の本質を根底に捉えた授業実践を行うことに加えて、情報活用能力の育成をはじめ、この先の未来も見据え、新時代に対応した教科の学びでありたいと常々考えている。同様に時代に即した学校図書館のあり方についても検討していくことが求められると考えている。

1 研究の目的

本題材では、「よりよい住まい方を考える」ことを学習のねらいとし、そのうえで目指す生徒の姿を2つ設定した。一つ目は、情報を適切に活用し、よりよい家族関係や豊かな住生活に向けて自らの考えを形成していく姿、二つ目は、自分自身の家族関係・住生活を見つめ、課題に気づき、その課題の解決に向けて、考えたことを自らの生活に生かそうとする姿である。

本研究は、本題材を通して目指す生徒の姿を

実現し、情報活用能力を育成することを第一の目的としている。また、教科のねらいの実現や情報活用能力の育成に向けて、授業実践の過程において、学校司書と連携し、学校図書館を活用していく中で、学校図書館の意義や有用性について明らかにすることが第二の目的である。

2 研究の方法・内容

(1) 実践の時期と対象

2022年5月から同年6月にかけて本校家庭分野の授業において、第2学年4クラス(137名)を対象に授業実践を行った。

(2) 題材の位置づけと学習指導内容の概要

本題材は学習指導要領「B 衣食住の生活」(6)ア、イを中核に据え、「A 家族・家庭生活」、「C 消費生活・環境」と関連をはかった住領域の学習であり、次のように9時間で内容を構成した。

| 時 | 内容 |
|------|---|
| 1・2 | ・自分と住まい・家族とのかかわりを見つめる ・書籍を通して住まいへの視野を広げる |
| 3・4 | 基本的な知識の確認、家族関係を考える |
| 5 | ・マイファミリーの家づくりに向けて考えるべきことや必要な知識について、外部講師から学ぶ |
| 6・7 | 模擬家族によるマイファミリーの家づくり |
| 8 | よりよい家庭生活、健康・快適・安全で豊かな住生活に向けて、よりよい住まい・住まい方を考える |
| 夏季休業 | 本題材を通して学んだことや他教科等と関連させ、「生活の課題と実践」に取り組む |
| 9 | ・各自が行ってきた実践を発表する ・改めて「よりよい住まい方」について考える |

第1・2時においては、まず自分自身の今の家族関係や住まい方を見つめる時間をとり、その後、家族・家庭生活や住まい、地域、環境等に関する書籍約200冊を自由に閲覧する時間を設けた。これらの書籍は、学校司書と相談しながら選書をし、学校司書の支援のもと、学校図書館をはじめ、近隣の公共図書館の書籍を借りたり、横浜市レファレンスサービスの回答等を参考に新たに購入したりした。

第6・7時においては、第3～5時において、「よりよい住まい方を考える上で大切にしたい家庭分野8つの視点」(家族関係、安全、健康・快適、日本文化、防災・防犯、地域、住空

間、地球環境)をもとにゲストティーチャーや家族から聞いた話、自ら調べたこと、授業で得た知識等を整理させた。そして、模擬家族による「マイファミリーの家づくり」に向けて、模擬家族での家族会議を通して互いに意見を出し合ったり、書籍やインターネット上の情報、コンピュータ支援設計ソフトを活用したりする中で、情報活用能力の育成を目指した。

3 研究の結果(詳細は別途、報告する。)

本題材の一連の授業での生徒のワークシートの記述を一部紹介する。(下線、筆者による)

私は最初よりよい住まいは何か考えた時に自分の理想や快適面の内容が多かったが、授業を通して様々な視点を学んだことで、家に対して客観視して評価することができるようになったし、それによって改善策なども考えられるようになった。また、住まいや住まい方は人それぞれ価値観に違いがあることが家づくりの授業のときに分かったから、住まいや住まい方にとても関わり深い家族関係も必要だと感じた。あと、私たちが年をとって行って、住まいや住まい方も変わっていくのだからお互いを思い合い、意識し合いながら改善し、よりよい住まいを更新していくことも重要だと思った。

自分の立場だけではなく、特徴がそれぞれ全然違う人達の視点も取り入れ、物事を多面的に見ることが大切だと知った。資料を見て終わりでなく、『どうして?』や『なぜ?』などの考えが出てきて、自分が納得行くまで調べていくことができるようになりました。

生徒の記述や発表の様子等から、これまでの学習や住経験を土台とし、よりよい住まい方を考える上で、多角的に情報を検討し、必要な情報を収集、整理、分析、表現する等、情報活用能力の育成につながったことが推察される。

4 研究のまとめと課題

「VUCAの時代」を生き抜いていくためには、社会の変化に受け身でいるのではなく、自ら主体的に考え、意思決定し、行動していく力が求められる。学校図書館は生徒の主体性を育み、「知の拠点」として新時代に求められる力の育成に寄与する存在であるといえる。現任校では、学校図書館が授業で比較的多く活用されているが、体系的な活用には至っていない。教科や領域等で育成した汎用的な力を自在に横断し、学びのネットワークづくりを検討していきたい。そして、学校図書館を中核に据えながら、教科の学びにとどまらず、教育活動全体を通して、生徒のよりよい成長や自己形成の実現に向けた学校図書館のあり方を考えていきたい。

[引用、参考文献]

- ・ 文部科学省『中学校学習指導要領(平成29年告示(解説)総則編』p.135, p.84

松江市教育委員会学校図書館支援センターにおける「学び方指導 体系表」の活用～「学びをつなぐ」実践を通して～

帝京大学教育学部 教授 鎌田 和宏

元松江市学校図書館支援センター教育指導講師 林 良子

〈要約〉

松江市小中一貫基本カリキュラム「学び方指導体系表」～子どもたちの情報リテラシーを育てる～（以下、体系表）の活用は、子どもの学び、教職員の学びをつなぐために効果的であった。このことを小中学校及び義務教育学校（以下、小中学校）と学校図書館支援センター（以下、支援センター）の実践をもとに述べる。子どもたちに情報リテラシーを育てるには、まず、教職員が情報リテラシーを体系的に指導することの必要性や、体系表を活用することの有用性を学び理解する必要がある。授業実践に手応えを感じるとさらなる実践が展開される。また、自治体内の学校同士で実践を共有する、子どもたちの学びをつなぐためのしくみを構築する等が教職員の学びへのモチベーションアップを図ることに効果的であった。

〈キーワード〉

学校図書館活用教育 情報リテラシー 学び方指導体系表 小中一貫教育の視点
教職員の学び 学びをつなぐしくみ

はじめに

本研究では、鎌田は体系表の作成・改訂の協力者として、林は作成・運用・改訂の実務担当者として関わった。林は2016年度の本学会研究発表大会において、改訂直後の第3版の作成手順や有用性等について発表した。本発表では、学校における実践を中心に述べる。

なお、松江市は、21世紀を生き抜く児童生徒に、思考力・判断力・表現力といった汎用的な能力を育てることをめざし、豊かな心を育む読書活動や課題解決のために情報を取り出し、分析・整理し、まとめ、伝え合うといった学び方を学ぶ学習を「学校図書館活用教育」と定義し取組を継続している。

支援センターは学校教育課内にあり、体系表は、支援センターが中心となって2012年度に初版を作成、最新は第5版（2021年公表）である。本発表は第3版（2016年版）をもとに述べる。

1 研究の目的

学校図書館活用教育の推進を図るにあたり、教職員が体系表の活用意義・方法を学び、協働することが、子どもたちの情報リテラシー育成につながることを示す。

2 研究の方法・内容

情報リテラシーを育てることを意識した授業実践、特色ある総合的な学習「まつえ学びプログラム」、体系表を活用した校長、教諭、司書教諭と学校司書の協働の事例から検討する。

3 研究の結果

(1) 授業実践から

単元や本時の目標達成に役立つ情報活用スキルを、指導案に「単元（本時）に関わる情報リテラシー」として項目を掲げ、学習のねらいと情報活用スキルを関連づけて示した。このことで、授業者をはじめ、参観者も、情報リテラシー育成の視点をもって授業研究を行うことができた。

体系表の縦軸に示した探究的な学習の過程にそって授業実践例を示す。

①知る（従来の図書館の利用指導）

- ・オリエンテーションをすべての学級担任が行っている学校。

②見つける「課題設定」

- ・3年～6年まで司書教諭が課題設定の時間をTT指導で授業支援。

③つかむ「情報の収集」

- ・図書を絞って提供し、図鑑の読み方を指導、繰り返し図鑑を使用する機会を計画。

④まとめる「情報の整理」

- ・ピラミッドチャートを使用して情報の整理、そこからフリップ作成。

⑤伝える「発表・交流」

- ・発表までの探究の過程を短時間で体験させ、他単元でも繰り返し指導し、総合で本格化。

(2) 体系表を活用した総合的な学習の時間

情報リテラシーは、探究的な学習において、探究の過程を繰り返し経験して、身につけていく。総合的な学習の時間は、教科等横断的に複数の教職員がチームとなって指導するため、情報リテラシー育成の上でも、教職員の共通理解を図る上でも絶好のチャンスである。

まっえ「学び」プログラムは、松江市の子どもたちに、「まとめる」「伝える」力の育成に重点をおいた特色ある総合的な学習の時間のプログラムである。学習内容と方法の両面から子どもたちの学びを保障している。

(3) 体系表を活用した校長、教諭、司書教諭、学校司書の協働事例

●学校図書館長としての校長の取組

中学校の国語科担当、学校教育課の指導主事を経た校長は、体系表の活用が、キャリア教育の視点からも有効であることを校内へ啓発していった。

●教諭、司書教諭、学校司書

年間指導計画の立案、授業の打合せ、図書館の環境整備に体系表は役だった。

4 研究のまとめと課題

林は教育指導講師として5年間多くの学校を訪問し、たくさんの授業実践に関わった。

子どもたちの情報リテラシー等の向上については、実際の授業の場面や教職員の言葉からうかがい知ることができた。また、全国学力・学習状況調査の児童・生徒質問紙では、総合的な学習の時間に探究的に学習していると捉えている児童生徒が増えた。

教職員からは、体系表は共有・協働を生みやすい、拠り所となることを聞き取った。

支援センターは、学校の実践を集積し、共有できるシステムの構築、小中連携した授業研究や情報交換会の開催、校内への働きかけに役立つ研修などを行った。共有と協働を生む仕組みは体系表の活用展開には重要であり効果的であった。また、全校での取組のキーパーソンである司書教諭の活動時間の確保・保障も体系表の活用の課題で、更なる取り組みの必要も明らかになった。他自治体においても、支援センター的な働きをする部署があると体系表の活用にはよいだらう。

最新の第5版は、体系表の中に育てたい子ども像を記載し、さらに教職員が活用を考えやすい体系表となり、ICTの活用についても視野に入れるようになってきている。GIGAスクール構想の展開に伴い、ICT機器の活用が注目を集めており、機器を使用する学習は増えるが、どう使うかだけでなく、その学習によってどのような情報リテラシーを育てるかを考え、効果的な使用場面を検討する事が必要であろう。ICTを担当する情報教育担当者と司書教諭・学校司書等が体系表を核に協議・協働することが求められる。

情報リテラシーの育成は、現行学習指導要領が求めている汎用的な資質・能力の育成に大きく貢献するものである。体系表の活用事例を検討し、各地域で体系表の作成・実践を試みる必要があるのではないかと。

【引用、参考文献】本研究の詳細については以下を参照されたい。

鎌田和宏 解説・監修 林良子 著(2022)『学びをつなぐ学校図書館-松江発！学び方指導体系表を活用しよう-』悠光堂

令和4年度 日本学校図書館学会研究発表大会研究発表要旨集

2022（令和4）年9月吉日 発行

- 発行 日本学校図書館学会
会 長 吉富 芳正
- 編集 日本学校図書館学会研究委員会
委員長 白敷 哲久
- e-mail : info@jssls.info

■ 賛助会員

(株)小学館
光村図書出版(株)
(株)紀伊國屋書店
(株)振興出版社啓林館
東京書籍(株)
(株)図書館流通センター
日本文教出版(株)
教育出版(株)
(株)樹村房
(株)大修館書店
大日本図書(株)
(株)帝国書院
(株)リブネット
スカラスティックジャパン
シェーンコーポレーションネリーズ事業部